

レビ記 19 : 18

マタイによる福音書 5 : 43~48

「天の父の子だから」

【招詞】 申命記 6 : 4~5

【讚美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 143 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 18 「心を高くあげよ！」

【祈祷】

【聖書】 レビ記 19 : 18、マタイによる福音書 5 : 43~48

【説教】 「義に飢え渴く人々は幸い」

<敵を愛する？>

これまで、マタイによる福音書の5~7章まで続く、イエスさまの「山上の説教」から、5章の冒頭にある、八つの幸いについて、一節ずつ聞いてきました。

先週は、その最後の幸い、「義のために迫害される人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである」との御言葉でした。

今日は、その後にさらに続いていく「山上の説教」の中から、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」との御言葉を聞いていきたいと思えます。

イエスさまは、弟子たちに言われました。43 節「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」。

これは、誰もがキリスト教の教えだと知っているような、有名な聖書箇所の一つだと思います。

しかし、これは、わたしたちにとって、とても耳の痛い教えではないでしょうか。

誰が、敵を愛することなんてできるのでしょうか。誰が、自分を傷つけ、酷い損害を被らせ、大切なものを奪い去った人のことを、愛することなど出来るのでしょうか。

むしろわたしたちは、そのような敵を、憎んだり、怒ったり、仕返しをしようとしみます。あるいは、二度と関わらないように、絶縁したいと思えます。

ですから、ある人は、この不可能に思えるイエスさまの御言葉を前に、反発を覚えるかも知れません。あるいは、どうせわたしには無理だと、最初から諦める気持ちになる。あるいは、なぜこんなことを仰るのか、苦しめられた者の気持ちはどうなるのだと、イエスさまに訴えたくなるかも知れません。

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」。どうしてイエスさまは、わたしたちに、このような不可能なことを、お命じになるのでしょうか。

<敵を憎め？>

さて、はじめにイエスさまは、「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている」と言われました。

「隣人を愛し、敵を憎め」。まず、「隣人を愛する」という教えは、旧約聖書において、神さまがイスラエルの民に命じてこられた掟です。

今日読まれたレビ記 19：18 に、こうありました。「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である」。

でもここには、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」とはありますが、「敵を憎め」とは、書かれていません。

「敵を憎め」との教えは、イスラエルの民の中で、「隣人を愛しなさい」という教えの解釈として、後から付け加えられたものであると言われています。

つまり、「隣人を愛しなさい」というのは、イスラエルの民の中の、同胞の兄弟姉妹を愛しなさい、という意味である。だから、それ以外の者である、異邦人や、仲間ではない人たちは、敵と見做して、愛さなくてもよい、という解釈です。

それが、人々の間で教えられてきたのです。

もしそうであるなら、この教えは、わたしたちにとっても、従うことが簡単になります。身内や、仲間を大切にする。大事な人を愛する。それなら誰でも出来るし、もうしているのではないのでしょうか。

そして、傷つける者や、意見の合わない者や、敵対する者は、愛さなくてよい。むしろ憎め。それは、わたしたち人間の、自然な感情の持ちように、一致していることです。

わたしたちは放っていても、仲間を愛し、敵を憎むようになっていくのかも知れません。

でも、イエスさまは、「隣人を愛し、敵を憎め」などというのは、本来の、神さまの律法に込められている思いではない。だから、本来の意味、本来の神さまの御心を知り、そのようにしなさい、と言われるのです。

「山上の説教」の八つの幸いの少し後、5：17 で、イエスさまはこう言っておられます。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」。

神さまの律法はいつしか、人によって歪められ、勝手な解釈がなされたり、自分の正しさを誇るためのものにされたり、他人を裁くために用いられたりしていました。

でも、神の御子イエスさまは、御自分の救いの御業を通して、神さまが本当にわたしたちに求めておられるもの、与えようとしておられるものを、明らかになさるために来られたのです。

<天の父>

ですからイエスさまは、神さまが求めておられることは、「隣人を愛し、敵を憎め」ということではなく、隣人を愛し、敵をも愛し、自分を迫害する者のために祈ることだ、と教えられたのです。

なぜ、そのようなことを仰るか。それは、45節にこうあります。

「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

ここで、イエスさまは、教えを聞いている人々に向かって、全能の造り主なる神のことを、「あなたがたの天の父」と言っておられます。

つまり、この教えは、これを聞いている弟子たちが、群衆が、わたしたちが、神さまの子どもとされている、という前提に置かれているのです。

そして、この、「わたしたちの天の父」は、どのようなお方であるか。それは、「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」方である、というのです。

天の父なる神さまは、すべての者をお造りになり、すべての者に恵みを注ぎ、すべての者を生かしてくださるお方です。

ですから、天の父は、悪人と善人、また、正しい者と正しくない者を、区別なさいません。どちらも愛しておられ、どちらも憐れまれ、どちらにも恵みを注がれるのです。

しかしわたしたちは、この父なる神さまのなさりように、不満を覚えるかも知れません。

悪人に、なぜ恵みなどお与えになるのか。よいものを与える必要などないのではないか。正しくない者は、痛い目に遭わせて、何なら滅ぼして下さっても良いのではないか。

わたしたちは、天の父なる神さまが、悪人を愛されること、正しくない者に慈しみを注がれることに、納得できない気持ちになったり、腹を立てたりするのです。

でも、そのように感じているとき。わたしたちは、自分は善人の側である。自分は正しい者である。そう判断しています。

わたしたちは、自分の基準で、人を、悪人と善人に、正しい者と正しくない者に、そして仲間と敵に、勝手に分けているのです。そして、敵を憎んでいる。

ということは、もしかすると、誰かはわたしのことを、悪人、正しくない者として分類し、敵と見做し、神さまの愛が注がれるべきではないと、思っているかも知れません。

しかし、神さまの正しさの基準で、神さまの義で、わたしたちが測られるとき。わたしたちの中には、誰一人、善人はおらず、正しい者もおりません。

みんな等しく、神さまの御前では、御心に背き、逆う、悪人であり。神さまの御許から離れていく、正しくない、罪人なのです。

それでも神さまは、わたしたちをご自分の敵と見做して、憎まれることはありません。

悪人も、正しくない者も、罪人も、愛してくださる。わたしたち、すべての者に太陽を昇らせ、わたしたち、すべての者に雨を降らせてくださる。すべての者に恵みを注ぎ、すべての者を生かしてくださる。

そして、究極的に、天の父なる神さまは、わたしたちを愛するあまりに、御自分の独り子であるイエスさまの命まで、お与えてくださるのです。

そして、父なる神さまは、背き、逆らい、離れて行ったわたしたちの、悪や、不正や、罪を、御自分の御子イエスさまの十字架に、すべて負わせてくださいました。

イエスさまの十字架の御前で、わたしたちは、自分のすべての罪がこの方に担われたことを、知らされます。そして、そこまでして、わたしたちと共にいたいと願ってくださるほどに、わたしが、神さまに愛されていること、赦されていること、受け入れられていることを、知らされるのです。

わたしたちは、このイエスさまの救いの御業を受け取り、この方と一つに結ばれることで、悪人なのに、正しい者と認められます。死ぬはずの者なのに、永遠の命を与えられます。そして、罪人なのに、まるで、神の独り子であるイエスさまと同じであるかのように、「神の子」と呼ばれる者になるのです。

だから、イエスさまは、わたしたちに向かって、神さまのことを、「あなたがたの天の父」と呼んでくださいます。そして、あなたがたは、その子どもなのだ。

これが、神さまの御心です。悪人にも、正しくない者にも、罪人にも、わたしたちにも、愛と恵みを惜しまず注ぎ、イエスさまによって、罪の赦しと、復活の命を与えること。

そして、神さまに敵対していたわたしたちが、神さまの子どもとされること。

そうして、わたしたちが、神さまとも隣人とも、愛の関係を築き、まことの幸いと喜びの中で、共に生きていくこと。

だから、もうイエスさまと出会い、幸いをいただき、神の子とされているわたしたちは、この「天の父の子」として、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」者となりなさい、と言われているのです。

神さまに敵対し、わたしたちを迫害してくる者は、イエスさまに出会う前の、かつてのわたしたちと同じです。

しかし、わたしたちは、それでも神さまに、愛され、赦され、受け入れられたのです。

だから、わたしたちも、自分の基準で人のことを、敵だ、味方だと区別したりせず。こちらは愛し、あちらは憎む、というようなことをせず。すべての者が、神さまの目に尊い、愛されている者であることを知り。すべての者の罪を赦すために、イエスさまの十字架の死があったことを知り。神さまの御心が実現するために、敵を愛していく。

自分を迫害する者のために、その者の救いのために、赦しのために、祈っていく。
そのような者になりなさい、とされているのです。

<並ではないこと>

そして、イエスさまは言われました。46～47 節「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか」。

自分を愛してくれる人を愛すること。それは、徴税人、つまり、罪人であったとしても、していることだ。自分の兄弟にだけ挨拶すること。それは、異邦人、つまり、神さまを知らない者であっても、同じことをしているのだ、ということです。

ここで、「どんな優れたことをしたことになるだろうか」とありますが、この「優れたこと」という言葉は、「並外れたこと」「通常ではないこと」という意味です。

つまり、「隣人を愛し、敵を憎む」ことは、優れたことでもない、並外れたことでもない、誰にでも出来る、普通のことだ、と言っておられるのです。

でも、それは翻れば、イエスさまは「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」ということは、わたしたちにとって、並外れたことであり、普通ではない、常識を超えていることだと、知っておられるということなのです。

でもその上で、神の子であるならば、そのようにしなさい、と命じられるのです。

さて、わたしたちは、なぜ、敵を愛さなければならないか。なぜ、自分を迫害する者のために、祈らなければいけないか。その理由、それを求めておられる神さまの御心は、これまでで、何となく分かってきたかも知れません。

でも、どうやって？と思います。やはり、実際、そう出来るかと言われると、無理だと感じてしまうし、自信もまったくないのではないのでしょうか。そして、わたしたちは、事実、自分でそう感じている以上に、とても弱く、無力で、貧しいのです。

でも、イエスさまが、わたしたちに困難なことをお命じになるとき。それは、イエスさまがわたしたちと共にいてくださるから、お命じになるのです。

イエスさまは、わたしが共にいるから、わたしがあなたを担っているから、わたしがあなたを強めるから、あなたは、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言ってくださるのです。

<あなたがたの天の父が完全だから>

だから、イエスさまは、48 節でこう言われます。「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」。

ここで、わたしたちは、「もっと無理です！」と言いたくなるかも知れません。

わたしたちの天の父が、完全であられることは、分かります。

でも、わたしたちも、そんな神さまのように、完全な者となりなさい、というのは、100%不可能なことではないでしょうか。

しかし、イエスさまは、自分の力で、神のような完全に至りなさい。崖を這い上って、雲を突き抜けて、高みへと上がってきなさい、とは言っておられるのではないのです。

まず、わたしたちは、わたしたちの天の父の完全さを、見つめなければならないのです。

神さまは、完全なるお方です。その御力は欠けがなく、その愛は欠けがなく、すべてにおいて完全な、全能なるお方です。

神さまは、その欠けのない、完全な愛のゆえに、敵であるわたしたちをも、愛し抜いてくださいました。

そして、父なる神さまの御心に、完全に従ってくださるイエスさまもまた、まことの神の独り子として、完全なるお方です。イエスさまは、その完全な愛のゆえに、敵であるわたしたちのために、十字架に架かって死んでくださった。そして、わたしたちの救いの御業を、完全なものとして、実現してくださいました。

…今、わたしたちが、「神の子」とされてここにいるのは、このように、天の父なる神さまの完全さのゆえに、愛され、赦され、救われたからです。

そして、御子イエスさまが、救いの御業を完全に実現してくださり、聖霊によって、欠けだらけのわたしたちを、完全なる御自分と、一つに結び合わせてくださったからです。

今、わたしたちが、ここで「神の子」として立たされている。

ここにまず、並外れたこと、通常ではないことを実現することがお出来になる、神さまの完全な御力が働いているのです。

ですから、この完全なる天の父と共にあること。聖霊によって、完全なるイエスさまと、完全に一つとされていること。

わたしたちは、そのことによって、はじめて完全となる事が出来るのです。

わたしたちの完全さは、神さまにある。イエスさまによっている。

だから、わたしたちは、神さまを離れては、イエスさまを離れては、何の力もないし、何をする事も出来ません。

しかし、すでに、通常ならざることを実現して、わたしたちを「神の子」としてくださった、その完全なる全能の天の父に、愛する力を求めていくなれば。そして、欠けのあるわたしたちでありながら、完全なるイエスさまと一つにされている、ということを感じるならば。このような、弱い、無力なわたしたちも、神さまの完全さによって、敵を愛していくこと、自分を迫害する者のために、祈っていく事が出来るのです。

人には出来ませんが、神には出来ます。

そのことを、わたしたちは受け入れ、心から信じなければなりません。

信じるとは、神さまに心から信頼する、ということです。神さまの完全な、全能の御力を、その愛を、そして、わたしたちを神の子として生かしてくださる、その恵みを。全身全霊で、心も、体も、生活も、人生もかけて、頼っていく、ということです。

わたしたちは、すぐに自分の弱さや、無力さや、出来なさに目を向けます。そして、失望したり、落ち込んだり、諦めたりしそうになります。

でも、わたしたちは、そんな自分の弱さや、欠けや、無力さを見つめるのではなくて。

そんなわたしの、弱さも、欠けも、罪も、死も、すべてを担ってくださり、わたしを、完全なる御自分の体の一部としてくださった、十字架と復活のイエスさまをこそ、見つめていきたいのです。そして、欠けのない、どこまでも惜しみない、完全な愛と恵みを注いでくださる、わたしたちの、完全なる天の父をこそ、見つめていきたいのです。

そこでこそ、わたしたちにも、完全なる神さまの御力が働いて、「神の子」とされた者にゆるされた、並外れた、通常ではない、愛に生きる歩みが、始まっていくのです。

【お祈り】

わたしたちの天の父なる神さま、御名をほめたたえます。

まず、敵を愛してくださったのは。悪人であり、正しくないわたしたちを愛してくださったのは、あなたでした。その愛のゆえに、イエスさまによって救い出され、神の子とされたわたしたちです。

そして、あなたはなお、造られたすべての者を愛し、救おうとしておられます。

どうかわたしたちが、敵だ、味方だと区別せず、わたしも含め、すべてのものが、神さまの愛を、憐れみを、救いを必要としていることを覚えて、祈っていくことが出来ますように。敵をも、隣人として、愛することが出来ますように。

それは、わたしたちにとって困難なことですが、完全なるあなたの御力に与ることによって、完全なるイエスさまと一つに結ばれていることによって、可能となることです。

イエスさまと一つに結ばれ、生かされ、支えられ、力を与えられているその恵みを、御言葉によって、特に今日は聖餐のパンと杯を通して、いよいよ確かなものとしてください。

そして、神さまの御心がなり、一人でも多くの方が、あなたの愛を知り、罪の赦しにあずかり、神の子とされる喜びに、生きることが出来ますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします、アーメン

【讚美歌】 288 「恵みにかがやき」

【信仰告白】 ニカイア信条

【聖餐】 【讚美歌】 72 「まごころもて」

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】 【祈祷】

【讚美歌】 28 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン